

一畑電鉄の大寺駅をまっすぐ南に行った斐伊川土手土手の道沿いに石造りの地藏尊を祀った小さなお堂があり地元では「伊丹堂」と呼んでいます。

古老の話によれば、その昔、斐伊川の大洪水のため堤防が切れ大きな被害にみまわれた時、地元では大勢の人々が修復をするためにかりだされましたが、中々水止めができませんでした。

板箕(いたみ) 売りの父娘が通りかかり

「人柱をたてなければ、水を止める事はできませんですよ」

「人柱は、禪(ふんどし)に赤いつぎ(あて布)のしてある人が効果的です」といったそうです。

工事の関係者たちはその言葉を信じて、通り掛かりの人たちを調べ始めた所、板箕(いたみ) 売りの父親が禪に赤いつぎをしていたため、やむなくその父親が人柱になったそうです。結果、土手の修復は成功して水は止まりましたが、板箕(いたみ) 売りの娘の悲しみは傷み(いたみ) 切れないほどだったようです。地元の人々は早速、板箕(いたみ) 売りの霊を鎮めるため、地藏尊を祀ったという人柱伝説が残っています。

それからしばらく時代は過ぎて、松江藩の初代藩主松平直正公が斐伊川の堤防づくりに力を注いでおられた頃、可愛がっていた

鷹が行方不明になってしまったそうです。

直正公がたいへん悲しがっておられた時、渡橋の観音様に

「鷹を返してくれるなら、お堂を建てます」

と約束されました。

鷹はまもなく直正公の元に帰って来ましたが、直正公は観音様との約束を忘れてしまいました。

参勤交代で江戸に出府された時、夢枕に渡橋の観音様からの使いの斐伊川の土手下に祀ってある地藏尊が現れ、

「約束した地藏堂を建ててください」

と言われました。観音菩薩を深く信仰されていた直正公は、直ぐに渡橋の観音堂の改築と、完成した斐伊川の堤防の上に瓦葺のお堂を建て、それまで堤防の下に

おられた地藏尊をこの堂に移し、堤防を守る仏とされました。

それが、現在でも「伊丹堂」

「いたみどう」と呼ばれて

毎年、六月十三日(旧)に

お祀りが行なわれています。

